

～豊かな心と確かな力 瞳輝く寒川の子～

寒川町立旭小学校

研究テーマ：「次の課題を見つける旭の子」 ～ふりかえりを生かして～

1 実践の目的

本校では、昨年度まで、研究主題を「自ら課題を見つける旭の子」と設定し、研究の手法として問いを立てる活動を行ってきた。主体的に課題を見つけ、他者との協働と対話を取り入れながら、互いに学び合い、さらに自分の考えを広げたり深めたりする力をつけてほしいという願いから主題設定に至っている。その願いは今年度も変わることなく受け継いでいる。

2022年度には、問いを立てる活動を2021年度まで取り組んでいた国語科だけでなく、算数科、音楽科、体育科、社会科、道徳科と教科を広げて取り組んだ。しかし教科を絞らなかったことにより、校内研究として指導を系統立てていくことの難しさが浮き彫りになった。一方で、新たな問いが生まれる場面がふりかえりの中で多く見られるようになり、ふりかえりを取り入れることで、子どもたち自身が次の課題を見出していけるのではないかという仮説をもつようになった。

そこで今年度は、研究主題を「次の課題を見つける旭の子」とし、研究教科を社会科と生活科に絞って、ふりかえりを生かす方法を探ることとした。

2 実践の内容

講師の北川達夫先生のご指導のもと、全学年を通して YWT 法を軸として、ふりかえりに取り組んだ。ふりかえりは、基本的に

授業のまとめの場面で行った。

「ふりかえり」については、以下のような共通認識をもって研究に向かった。

〈ふりかえりの定義と効用〉

- ①変化の激しい社会の中で、他社と関わり合いながら生きるための力のひとつ（OECD,2005）
- ②学習に意味を見出す→意味を見出すプロセスから学ぶ/知識の整理・関連付けから学ぶ（Dewey,1916/Moon,2004）

〈ふりかえりの三態様〉

（Dewey,1916/Moon,2004）

- ①学習プロセスの認識：学びの基本
何を、どのように学んだか（学びに向かう力を育む）
- ②知識・技能の整理と統合：教科
生活科・社会科に生かしていく。学んだことを既有知識と関連付ける。（知識・技能の構造化）
- ③行動・心がまえのふりかえり：行動改善
行動の改善、非認知能力の向上

YWT 法：

Y：やったこと（授業で何を学んだか）

W：わかったこと（新たにわかったことは何か。気づいたことは何か。既有知識との比較）

T：次にやること（さらに知りたいことは何か。行動改善または探求）

3 実践の成果

これまで本校では、「自ら課題を見つける旭の子～問いを立てる活動を通して～」を研究主題として、主体的に学習に向かう力

の育成に取り組んできた。2018～2021年度に行った国語科の物語文では、問いを立てる活動が定着したことで、見通しを持って進んで問いを立てたり、問いに対する自分の考えをしっかりと持ったりと、主体的に学習に取り組むようになってきた。また、問いを精選する力が身に付き、考える価値のある問いを見極められるようになったことで、読みを深めることにつながった。

昨年2022年度は、国語科の物語文を引き続き追求しつつ、さらに問いを立てる活動を他教科に広げ、算数科、音楽科、道徳科、社会科で研究を進めていった。問いを立てる活動の中で、ふりかえりを生かし、個人の学習課題にしていくことが有効ではないかと新たな仮説を立てることができた。一方で、教科を広げて取り組んだことにより、学年ごとに指導を系統立てていくことの難しさを感じた。そこで、今年度は、「次の課題を見つける旭の子～ふりかえりを生かして～」を研究主題として、主体的に学習に向かう力の育成にさらに取り組んできた。学習や自己の活動を振り返り、その意味を考え、学習の価値を自覚させることで、生まれた気づきや疑問などから新たな課題を見出し、次の学びにつなげていきたいと考える。教科は、社会科・生活科にしぼり、引き続き北川達夫先生のご指導のもと、全学年YWT法を軸として研究を進めてきた。

YWT法(やったこと・わかったこと・次にやること)は、大きく学習の内容面と活動面の2種類がある。学習の内容面として、Y:今日の授業で学んだこと、W:初めて知ったこと・びっくりしたこと・興味をもったこと、T:もっと知りたいこと・新しく知りたいことがある。活動面のYWT法として、Y:どのような活動をしたか、W:この活動で気が付いたこと、T:行動改善が挙げられる。

これらを踏まえて、たけのこ級では、YWTのYに重点を置き、個人ではなく全体でふりかえりを行った。低学年では、YWを全体で確認したりインタビュー形式にしたり、口頭中心で行った。中学年では、導入で前時のふりかえりを全体で確認し、終末にYWTを書かせ、単元計画に生かした。高学年では、毎時の終わりにYWT法を取り入れたふりかえりを行い、次時の課題設定に結び付けるなど、授業改善を図った。

既習事項に加え、本時の授業を通して新たに得た知識や概念をもとに、次の学習目標を立てられるようになってきたことが成果として挙げられる。ふりかえりを行うことで、学習における自分の学びや成長への気づきを促すことになり、全体でふりかえりを共有することで、より深い学びへとつながったと考えられる。また、自己の学習への充実感が得られたのではないだろうか。

4 今後の展開

これまでの研究を通して、発達段階に応じて、どのようなステップでふりかえりをもつとよいのか、どのような形式やツールを用いたふりかえりが主体的に学習に向かう力の育成につながるのかを、引き続き考えていく必要がある。限られた時間の中で、子どもたち一人ひとりの学びの成果や過程を振り返る機会をどのようにつくっていくかが重要である。今後も単元ごとにねらいをもって計画的に取り入れられるように工夫し、振り返ることへの習慣化を図っていきたい。そこから見えた子どもの学びの実態を教師の授業や指導改善につなげていく。そして、ふりかえり活動を教科指導だけでなく、行事や日常生活にも取り入れ、旭小学校全体で、主体的に考え、学びに向かう力の育成に取り組んでいきたい。